

フェドシューク
『古典作家の難解なところ
あるいは
19世紀ロシアの生活百科』(その8)

Ф. А. Федосюк

Что непонятно у классиков

или

Энциклопедия русского быта XIX века

鈴木 淳 一
飯 島 由 大
伊 藤 敏 宏
岡 田 京 子

これは「文化と言語」56号(2002年3月)、57号(2002年10月)、62号(2005年3月)、63号(2005年10月)、64号(2006年3月)、65号(2006年10月)、66号(2007年3月)に発表したフェドシューク著『古典作家の難解なところ、あるいは19世紀ロシアの生活百科』翻訳の続きである。9章、1章、2章、3章、4章、5章、6章に続いて、今回は7章を訳出することとした。今回の翻訳作業も、大学院生が主体となり、鈴木がそれに朱を入れるというスタイルでおこなった。7章は9節からなるが、伊藤が1節、岡田が2節、飯島が4節、3、5～7節を鈴木が分担し、最後に鈴木が全体的な文体の統一を図った。

注についても前回同様である。訳注は [] という形でできる限り本文中に組み入れるようにしたが、より詳細な説明が必要と判断した場合は脚注をつけた。訳語だけで分かり難い場合はロシア語を並列するようにしたのも前回同様である。

第7章

軍隊と親衛隊

АРМИЯ И ГВАРДИЯ

1 節

新兵供出義務

Рекрутская повинность

「全国民兵役義務 всеобщая воинская повинность」がロシアに導入されたのは、1874年のことである。常備軍を発足させたピョートル I 世時代から 1874 年にいたるまで兵役に就いていたのは、〈新兵徴募 рекрутский набор〉で集められた農民と町民階層の青年男子であった。貴族は、1762 年までは全員兵役に就かなければならなかったが、その後 1874 年までは個人の自由意志に委ねられた。ピョートル I 世はまた〈コサック軍 казачьи войска〉も常備軍に組み入れたが、それまでコサック軍に軍事作戦へ参加してもらうためにはその度ごとに合意を取りつける必要があったのである。

兵役期間は初め終身であったが、1793 年から 1834 年までは 25 年と定められた。その後徐々に短縮され、「全国民兵役義務」が制度化されて以降、すなわち 1874 年以降になると現役期間は 6 年となったが、1905 年から 1908 年までは 3 年から 5 年の間であった。

革命以前における兵役は永遠に、あるいは長い間、男性を家族と定住地から引き離れたが、その代わり農奴の隷属状態から解放したのであった。

「新兵徴募」は毎年実施されたわけではなく、必要に応じて実施された。一定数の〈新兵 рекрут〉が必要になると、県や郡、郷ごとに割当命令書が発布された。具体的に誰を新兵として供出するかは、市町村の共同体が決定した。農奴制下の地主の持ち村では、地主自らが候補者を選定した。通常この犠牲となったのは、独立独歩で意志の強い青年、いわゆる「はみ出し者 смутьян」か、あるいは誰もが遠ざけたがっている働きの悪い怠け者であった。

市町村の共同体は新兵に行くべき人間を順番に選定しようとしたが、これは複雑にして議論の錯綜する問題で、ときには籤引きが採用された。家長は青年に達した息子の数に応じて〈6男持ち шестерник〉、〈5男持ち пятерник〉、〈4男持ち четверник〉等々と呼ばれた。真っ先に新兵に出されたのは、息子の数の多い家庭の青年であった。ダーリはこう記している——「5男持ちの家庭は、3男持ちの家庭がすべて一人ずつ新兵を出し、2男持ちの家庭に新兵供出の順番が回るまでに、2人目の新兵を出している Пятерниковая семья ставит второго рекрута, когда все наличные тройники поставили по первому и очередь доходит до двойников」[ダーリ В.Даль、『詳解辞典 Толковый словарь』、《пятерик》の項目記事]。地主夫人と村の寄り合いによる新兵選定の様子については、トルストイの短篇『ポリクウシカ Поликушка』においてドラマチック、かつ詳細に描き出されている。

地主は気に入らない屋敷番農民 дворовый を順番など無視して新兵に出すことができ、その代償として相当な額面の〈新兵領収書 рекрутская квитанция〉を受け取った。地主は通常その領収書を、兵役の順番が当たっている息子を持つ裕福な農民に売りつけた。地主の中にはこの「領収書」(民衆は「控え фитанция」と呼び習わしていた)によってかなりの額を蓄財する者もあった。

選定された青年たちは共同体の指名した人々(〈引渡し人 отдатчик〉)によって〈軍衙 воинское присутствие〉のある都市へ徒歩で、あるいは乗り物で送り届けられた。青年たちはそこで健康診断を受け、軍衙長はその診断結果を踏まえながら「額 лоб」とか「うなじ затылок」とか叫んだ。適格者は〈額を剃られ брили лоб〉、つまり髪の前頭部を剃り落とされ、不適格者は後頭部を剃りあげられた。それは、青年が検査を受けたということを示す確かな目印であった。剃り落とされた前頭部は否が応でも目につき、隠し通すことなどできなかつたからである。

ここまでくればもう『エヴゲニー・オネーギン』中で出会う、年老いたラーリナ夫人が「金勘定をしたり、額 [後頭部] を剃り落としたり вела расходы,

брила лбы」[2章32節]という一句も理解可能となるだろう。この持って回った言い方は要するに、「農民を新兵に出す отдавать крестьян в рекруты」という意味なのである。クルイローフの寓話『三人の農夫 Три мужика』には、「今回の新兵徴募ではあいつの額が剃り落とされるってさ [今回はあいつが新兵に取られるってさ] Ведь в нынешний набор забреют лоб ему」と書かれている。トルストイのポリクウシカは、新兵に選定され、軍衙に連れて行かれようとするイリヤーを、「だけどうまくいけば、まだうなじってこともあるさ [だがうまくいけば、まだ新兵検査で撥ねられるかもしれないさ] Еще, Бог даст, затылок」と言って慰めている。それに対して健康で屈強そのものの若者イリヤーは、「まさかこの俺がうなじってことなどあるもんか [まさかこの俺が撥ねられるなんてことなどあるもんか] Уж какой мне затылок」と理に叶った返答をしている [『ポリクウシカ』8章]。

「新兵になる попасть в рекруты」ことはまた、〈赤帽を被る угодить под красную шапку〉とも言われた。ここでの「赤い красная」は色を指しているのではなく、「美しい、晴れ晴れとした красивая, нарядная」といった意味である。かつて軍帽は一般人の帽子とは違い、その色鮮やかさと派手さで際立っていたからである。

ときに〈新規徴集兵 сдаточный〉とも呼ばれた「新兵 рекрут」の供出には、制度の悪用濫用がつきまとうこともしばしばであった。ゴーゴリの『検察官 Ревизор』では金物屋の女房フェヴローニヤ・ポシリョープキナがフレスタコーフへ市長のことで泣きついている——「私の夫に額を剃り落とすよう [兵役に就くよう] 命じたんでございます。まだ私たちの順番はきていないののでございます。とんでもないペテン師なんでございます！ しかも法律に照らしたってそんなことはできっこないんでございます。夫は妻帯者なんでございますから мужу-то моему приказал забрить лоб в солдаты, и очередь-то на нас не припадала, мошенник такой! да и по закону нельзя: он женатый」[4幕11場]。そしてすぐ次の場面では、「新兵に出る順番が当たっているидти в очередь」はずの青年たちの両親は市長に多額の賄賂を積んで自分の子供の兵役義

務を免除してもらっていることが判明するのである [同前]。

オストロフスキーの『熱き心 Горячее сердце』では商人のクッロスレポフが彼の屋敷に忍び込んだ零落商人の息子ワーシャを、忍び込んだ仕返しに「仲間を代表して新兵に出す сдать в некруты за общество」、つまり共同体を代表して兵隊に出すと言って脅している [2幕4場]。

新兵は手枷、あるいは足枷をはめられて軍衙へ連行されることも稀ではなかった。道中脱走しないようにするためであった。ラヂーシチェフは『ペテルブルクからモスクワへの旅』の「ゴロドニャ」の章に、村々から新兵たちが連行されてゆくときの胸を切り裂くような悲惨な光景を描き留めている。

民衆が「新兵徴募」をどのように見ていたかについては、ネクラーフが次のように評している――

「徴兵」という言葉に対する民衆の恐怖は
死刑の恐怖にも匹敵した。

И ужас народа при слове «набор»

Подобен был ужасу казни.

【『誰にロシアは住みよいか Кому на Руси жить хорошо』第4部「大宴会 Пир ― на весь пир」4章「よき時代 ― よき歌 Доброе время ― добрые песни」】

〈新兵 рекрут〉(俗語では〈新顔 некрут〉)という術語と〈新兵供出義務 рекрутчина [рекрутство]〉という概念は、兵役義務が全国的なものとなった1874年以降その姿を消した。

2 節

親衛隊

Гвардия

「親衛隊」と呼ばれたのは、ピョートル I 世が「少年遊戯軍団 потешные

войска」から作り出した特権的な精鋭部隊のことで、初めは「プレオブラジェンスキー連隊 Преображенский полк」と「セミョーノフスキー連隊 Семёновский полк」の二部隊からなっていた。これら二連隊が公式的に「親衛隊」（より正確には「宮廷付親衛隊 лейб-гвардия」）の称号を授かったのは1700年のことである。「親衛隊」の兵士は強力と身長の高さで際立っていた。ソバケーヴィチはチチコフに、自分の農奴だった故ステパン・プロープカのことを褒めちぎりながら、こう言っている——「もしも親衛隊に出仕しようものなら、何でもお望み次第だったでしょうよ Служи он в гвардии — ему бы Бог знает что дали」[『死せる魂 Мёртвые души』1部5章]。このプロープカの身長は、もちろんソバケーヴィチを信じていいのならの話だが、3アルシン1ヴェルシヨーク、ということはおよそ217cmだったことになる[1アルシン≒71cm、1ヴェルシヨーク≒4.45cm]。

〈宮廷付親衛隊 лейб-гвардия〉、つまり文字通りの「皇族身辺警護隊 личная охрана」は初め皇后に直属していたが、その後そうした機能は消滅するとともに、「宮廷付」という接頭辞も本来の意味を失った。とはいえ「親衛隊」の大部分は1917年に至るまで公式的には、伝統に敬意を表して「宮廷付親衛隊」と名乗った。というわけで、ロシアには「親衛隊」と区別されるような特別な「宮廷付親衛隊」なるものは一切存在しなかったことになる。

「親衛隊」に将校として勤めることは殊更の名誉とみなされたが、高価な装身具や馬の入手等々といった格式に関わる余計な出費を少なからず求められた。したがって「親衛隊」に将校として勤めることができたのは、裕福な貴族の子弟だけであった。19世紀初頭以降、親衛隊将校の官等は（大佐と将官を除いて）、一般軍人の官等よりも実質的に2階級上であるとされた。たとえば「親衛隊中尉 гвардейский поручик」は「陸軍大尉 армейский капитан」に相当したのである[通常中尉は12等官で、大尉は9等官だが、11等官は一時期しか存在しなかったので、両者の差異は2階級ということになる。「文化と言語」66号、115頁参照]。1884年以降になると両者の差異は1階級となった。

エリート軍人を自認する親衛隊将校は、一般の軍人仲間に横柄な態度をとっ

た。レールモントフの『現代の英雄 Герой нашего времени』中の1篇『公爵令嬢メリー-Княжна Мери』でグルシニツキーが親衛隊将校について毒づくのも、だから理由のないことではないのである——「こういった傲慢な上流社会の連中は我々一般軍人を、まるで野蛮人でも眺めるような目で見ているのだ Эта гордая знать смотрит на нас, армейцев, как на диких」[5月11日付の最初の手記]。

親衛隊将校は勤務時間内ではもちろん、勤務時間外でも格別に粹 шик であることが要求された。『アンナ・カレニナ Анна Каренина』1編でトルストイは親衛隊将校であるヴロンスキー伯爵の放埒な生活ぶりを描いているが、それは青年貴族に典型的な生活であった [34章]。

軍隊と宮廷におけるあらゆるセレモニーにおいて「親衛隊」には一等席が与えられたが、その〈名誉連隊長 шеф полка〉、すなわち最古の親衛連隊(プレオブラジェンスキー連隊)の名誉連隊長は、形式的には皇帝自身ということになっていた。

ゴンチャロフの『懸崖 Обрыв』に出てくるライスキーの祖母は、「親衛隊」の軍服を纏った孫の姿を目の当たりにしたいと夢見ている [1編10章]。『戦争と平和 Война и мир』ではドルゥベツカーヤ公爵夫人が一人息子のボリスを「親衛隊」へ勤務させようと東奔西走するが [1部1編4章]、その後息子の軍装代のないことが発覚し、金を無心せざるを得なくっている [1部1編11章]。

「親衛隊」から一般軍隊への異動は処罰と考えられていた。プウシキンの『大尉の娘 Капитанская дочь』では「親衛隊」に軍曹として登録されていたペトルウシャ・グリニョーフが、厳格な父親によって軍隊へ送られている——「軍隊に勤め、辛く単調な仕事に精を出し、火薬の匂いを嗅ぐがいい Пускай послужит в армии, да потянет лямку, да понюхает пороха」[1章「親衛隊軍曹」]。かくしてグリニョーフは見捨てられたペロゴールスカヤ要塞に派遣される。要塞では片目の中尉が彼に、彼が軍隊送りになったのは「親衛隊将校にあるまじき非行のせい за неприличные гвардии офицеру проступки」ではない

かと問い質している。前例が手近にあったからである。すなわちシワーブリンが決闘による殺人の咎で「親衛隊」からこの僻遠の要塞守備隊へと移動させられていたのである [3章「要塞」]。

『智恵の悲しみ Горе от ума』のチャーツキーは、モスクワ貴族連の軍服に対する、とりわけ「親衛隊」の軍服に対する異常な愛着を笑いのめしている――

親衛隊から、あるいは宮廷からここへ

誰かがしばし訪れでもしたら、

ご婦人方は「万歳！」と叫び、

頭巾を宙へ放り投げたものでした！

Когда из гвардии, иные от двора

Сюда на время приезжали, —

Кричали женщины: ура!

И в воздух чепчики бросали!

[2幕5場]

スカロズuppはチャーツキーの皮肉に気づかず、モスクワ人の「親衛隊」びいきに言及してくれたことで彼を褒め称えている――

私の気に入ったのは、いまのお話であなたが

人気者の親衛隊、宮廷警護隊、親衛隊員に対する

モスクワの人々の鼻屑ぶりについて

なんとも見事に言い当ててくれたということです。

世間はあの金糸の刺繍を太陽さながらに崇めているのです！

Мне нравится, при этой смете

Искусно как коснулись вы

Предубеждения Москвы

К любимцам, к гвардии, к гвардейским, к гвардионцам;

Их золоту, шитью дивятся, будто солнцам!

[2幕6場/なお「предубеждение」については、それがここではそもそもの「偏見」という意味ではなく、「臆惧、選り好み предпочтение」という意味だというフェドシュークの注釈に従って訳した]

実際、金糸の刺繍が施された「親衛隊」の制服は、一般の軍服よりもはるかに見栄えがした。〈親衛隊員 гвардионец〉と呼ばれるようになったのは、1812年の戦役で武勲目覚しく、1813年に「親衛隊」として登録された「宮廷付擲弾兵連隊 лейб-гренадерский полк」、**「宮廷付胸甲騎兵連隊 лейб-кирасирский полк」**、それに「パヴロフスキー連隊 Павловский полк」の兵士たち、すなわち俗に言う〈若き親衛隊 молодая гвардия〉の隊員たちである。古くからの「親衛隊」と違って「若き親衛隊」の官等は1884年まで、一般軍人のそれよりも1階級上であるとされていた。

「親衛隊」は基本的にペテルブルクとその近郊に常駐し、特別な場合に限ってモスクワへも出かけた。レールモントフの『リゴーフスカヤ公爵夫人 Княгиня Лиговская』ではヴェーラがペチョーリンにこう言っている——「…私たちが可哀相なモスクワ住民にとって、親衛隊の軍服は珍品中の珍品ですわ！… ..Нам, бедным москвитянкам, гвардейский мундир истинная диковинка!..」[4章]。親衛隊将校はモスクワの乙女たちにとって理想の花婿であった。

モスクワへやってきた若い商人ワシーリコフがテリャーテフに、リヂヤの気に入ってもらうためには何が必要かと尋ねると、テリャーテフはこう答えている——「美しい親衛隊の軍服、それに少なくとも大佐の官等だね Красивый гвардейский мундир, да чин, по крайней мере, полковника」(オストロフスキー『泡銭 Бешеные деньги』[1幕1場])。

スカロズuppもその一員である一般軍隊の将校には、一種独特な礼儀と習性があった。たとえばその一つは、相手を見下すようにしてファゴットの音色を思わせるような横柄な嘎れ声で話すというものである。チャーツキーはスカロズuppの話し方に見られるこうした特性を、「嘎れ声男、首吊り男、ファゴッ

ト хрипун, удавленник, фагот」と形容してせせら笑っている [3幕1場]。

3 節

軍人の官等

Военные чины

ピョートル I 世によって「官等表 Табель о рангах」が導入されるとともに、武官もまた文官と同様に全部で14の官等に分けられることになった。「兵士の官等 солдатские чины」や〈下士官の官等 унтер-офицерские чины〉といった、いわゆる〈下級官等 нижние чины〉が「官等表」に組み込まれたことは、かつて一度もない。とはいえここではそうした「下級官等」から始めることにしよう。

「兵士の官等」は以下のようなものであった。

1. 〈一兵卒 рядовой〉。「一兵卒」は「歩兵隊 пехота」や「騎兵隊 кавалерия」ではその勤務形態に応じてそれぞれ〈銃兵 мушкетёр〉、〈擲弾兵 гренадёр〉、〈驃騎兵 гусар〉などと呼ばれていた。また「砲兵隊 артиллерия」では〈砲撃手 бомбардёр/канонёр [前者は17~18世紀、後者は19世紀]〉、「コサック軍 казачье войско」では〈カザーク казак〉と呼ばれていた。

2. 〈上等兵 ефрейтор〉。この「上等兵」は「砲兵隊」においては〈砲撃照準手 бомбардир-наводчик〉、「コサック軍」では〈砲撃号令手 приказный〉と呼ばれていた。

これに「下士官の官等」、すなわち下級幹部の官等が続く。

1. 〈下級下士官 младший унтер-офицер〉は通常、「分隊 отделение」の指揮にあたった。「砲兵隊」の場合、この「下級下士官」に相当したのは〈副砲兵下士官 вице-фейерверкер〉である。

2. 〈上級下士官 старший унтер-офицер〉は通常、「小隊長 командир взвода」の副官を務めるか、あるいは自らが小隊の指揮を執った。「砲兵隊」の場合、この「上級下士官」に相当したのは〈砲兵下士官 фейерверкер〉で

ある。

「コサック軍」の場合、これら二種類の下士官に相当したのは〈コサック下士官 урядник〉であった。プウシキンはデニス・ダヴィドフに自著『大尉の娘』を送付するに際して、プウガチョーフのことをこう歌っている——「君の前衛部隊に配属されたなら／彼は勇猛果敢なコサック士官であっただろうに В передовом твоём отряде／Урядник был бы он лихой」¹。

3. 〈曹長 фельдфебель〉は、「中隊長 командир роты」の副官の役割をこなした。ここで思い出さずにはいられないのは、レペチーロフとその仲間の自由思想家たちを脅迫するスカロズuppの言葉である——

[他の連中を招待したまえ。でもお望みなら]

グリゴリー公爵やお前さんたちのところへ

ヴォルテール代わりに曹長をいかせよう。

さればその曹長はお前さんたちを横三列に並ばせ、

つべこべ抜かそうものなら、すぐに黙らせてしまうでしょうよ。

[Скликай других, а если хочешь,]

Я князь-Григорию и вам

Фельдфебеля в Волтеры дам,

Он в три шеренги вас построит,

А пикните, так мигом успокоит.

[『智恵の悲しみ』4幕5場]

「騎兵隊 кавалерия」や「コサック軍」の場合、この官等は〈騎兵曹長

¹ 引用箇所は、『ダヴィドフへ。「プウガチョーフ叛乱史」送付にあたって Д.В.Давыдову. При посылке Истории Пугачевского бунта』の最終2行。フェドシュークは「『大尉の娘 Капитанская дочь』を送付するに際して」と言っているが、間違いではなからうか。生前発表されることのなかったこの詩作品は、出版された『プウガチョーフ叛乱史 История Пугачевского бунта』をダヴィドフへ送付するにあたって、1836年1月18日に書かれたものだと思われる。

вахмиср〉と呼ばれていた。

4. 〈特務曹長 подпрапорщик〉は、下士官の官等中もっとも上位の官等で、コサック軍の〈准尉 подхорунжий〉にあたる。「特務曹長」は「下級官等」であったから、敬称を持つ権利を与えられていなかった。クूपリーンの短篇『結婚 Свадьба』には、スレースキン曹長が自分の伝令に「誉あるお方 ваше благородие」と呼ぶように命ずる様子が描かれている——「この自己讃美はスレースキンにとって何か格別な魅力を持っているのである В этом самовозвеличении есть для Слезкина какая-то особая прелесть」〔2章〕²。

貴族出身ではない者の場合、ごく稀にはあるが、比類のない勇猛果敢さ、あるいは非の打ち所のない勤務態度に対する褒賞として将校の官等が授与されることもあったが（その場合でもしかなるべき教養を身につけていることが必要であった）、それでも1874年の改革までは原則として「下士官 унтер-офицер」以上の出世はありえなかった。年季を勤め上げた下士官（俗語では〈下士 ундер〉）はしばしば、屋敷番 дворник か守衛 сторож、あるいは玄関番 швейцар に採用された。彼らを奉公人として雇うのは、しかも彼らが「勲章 кавалерия=награда」を持っていればなおさらに、裕福な商人家庭にとっては名誉なことであった。オストロフスキーの喜劇『真実もよいが、幸福はもっとよい Правда хорошо, а счастье лучше』にはこんな台詞が出てくる——「商家でしかも裕福だというのに門脇に下士がいない——これはいったいどうしたことだ？ Купеческий дом, богатый, да нет ундера у ворот — это что ж

² 引用文中の「格別な魅力 особая прелесть」は「秘めやかな魅力 тайная прелесть」の間違ひと思われる。ついでながらこの引用文の前文はこうなっている——「彼の階級からすれば、彼はせいぜい『特務曹長殿』と呼ばれるぐらいが関の山なのだろうが、彼は伝令に対し断固として彼を『誉あるお方』と呼ぶよう命じたのであった По его званию, его надо бы величать всего только «господин подпрапорщик», но он раз навсегда приказал вестовому называть себя «ваше благородие»。「誉あるお方」という敬称は陸軍少尉補（14等官）、陸軍少尉（13等官）、陸軍二等大尉（10等官）、陸軍大尉（9等官）に対するものであり、この特務曹長は自己を格上げし、いわば尉官を詐称しようとしているのである。官等表についての詳細は「文化と言語」66号（2007年3月）、115頁を参照。

такое?» [1幕4場/庭師グレープ・メルクゥルィチの台詞]。そうした「下士」に属する退役の「騎兵曹長 вахмистр」、雄々しきシーラ・エロフェーイチ・グローズノフは、偉大な劇作家オストロフスキーの創造したもっとも華々しい登場人物の一人である [上述喜劇の2幕と4幕に登場する]。

ある村に赴き、その村を自分なりの秩序で牛耳ろうとするチェーホフの退役下士官プリシベエフは、専制国家ロシアにおける警察権力の恐ろしい象徴としてロシア文学にその名を留めている [『下士官プリシベエフ Унтер Пришибеев』]。

18世紀における下士官の官等と言え、**〈軍曹 сержант〉**と**〈伍長 капрал〉**であった。『大尉の娘』のグリニョーフは、「親衛隊軍曹 гвардии сержант」という官等を持って要塞守備隊へ出向いている。一般民衆は「軍曹 сержант」という名詞を「戦闘する сражаться」という動詞に引っかけて、「軍曹」を**〈闘兵 сражант〉**と呼んでいた。トゥルゲーネフの短篇『時計 Часы』では靴の修理をする「退役闘兵 отстасной сражант」のことが語られている³。

「軍曹」は時代の流れとともに「曹長 фельдфебель」、あるいは「上級下士官 старший унтер-офицер」に取って代わられるが、その「軍曹」の下位にあったのが「伍長 капрал」で、「伍長」は通常**〈分隊 капральство (=отделение)〉**を指揮した。フォンヴィージンの『未成年 Недоросль』に出てくるタラス・スコチーニンは「伍長で退役 отставлен капралом」しているが [2幕3場]、それはつまり貴族にすれば非常に低い官等で退役したということである。

³ 引用部は5章に出てくるが、正確にはこうである——「退役軍人で、闘兵 солдат отставной, сражант」。

4 節

将校の官等

Офицерские чины

将校は〈下級将校（尉官） обер-офицер〉（「少尉補 прапорщик」から「大尉 капитан」まで）と〈上級将校（佐官） штаб-офицер〉（「少佐 майор」から「大佐 полковник」まで）に分かれていた。

かつての連隊仲間ゴーリチに対するチャーツキーの質問——「君は下か上か Ты обер или штаб?」 [3幕6場]——は、「君は下級将校か、それとも上級将校か Ты обер-офицер или штаб-офицер?」という意味に解さなければならない。彼ら二人は久しぶりに再会したのであって、ゴーリチはその間に「上級将校」まで昇進できたはずなのである。

ゴーゴリの短篇『鼻 Нос』の主人公コワリョーフはこう考えている——「劇場の芝居では下級将校関係のものは何でも俎上にのぼらせることができるとしても、上級将校を標的にするなど絶対にあってはならないことだ в театральных пьесах можно пропускать все, что относится к обер-офицерам, но на штаб-офицеров никак не должно нападать」 [2章]。

1. 〈少尉補 прапорщик〉。「肩章 погон」に「星章 звёздочка」1つ戴く「少尉補」は、将校の最下級官等であった（ここではもちろん、これ以降も念頭においておくべきは、「裝飾肩章 эполет」に「星章」が飾られるようになったのはやっと1828年、「将校肩章 офицерские погоны」に「星章」がつくようになったのはやっと1854年に過ぎないということである）。1884年以降この官等は廃止され、戦時においてのみ導入されることになった。18世紀の「砲兵隊 артиллерия」においてこの官等に相当したのは〈砲兵准尉 штыкёр〉であった。トゥルゲーネフが描く『荒野の王リア Степной король Лир』たるハルローフは、退役した「砲兵准尉」である。「少尉補」に任官されているのは、『大尉の娘』のグリニョーフ、それにレールモントフの『現代の英雄』中の一編『ペーラ Бэла』におけるペチョーリンである。

2. 〈少尉 подпоручик〉の「肩章 погон」には「星章」が2つついていた。1884年以降は、それまで「少尉補」と同等であった「騎兵隊 кавалерия」の〈騎兵少尉 корнет〉、それにコサック軍の〈コサック少尉 хорунжий〉が「少尉」相当となった。クプリーンの中篇『決闘 Поединок』の主人公ロマショーフが、この「少尉」である。「騎兵少尉」という官等が読者に御馴染みなのは、流行歌ともなったネクラソフの詩作品『トロイカ Тройка』(1846)のおかげである――

通りすがりの騎兵少尉が、背筋をぴんと伸ばし
手を優雅に腰に当てながら、お前を見つめていた。

На тебя, подбоченясь красиво,
Загляделся проезжий корнет.

[2連3～4行]

プッシュキン描くヴラヂーミル・ドゥブロフスキーは、「陸軍幼年学校で教育され、『騎兵少尉』として親衛隊へ配属された воспитывался в кадетском корпусе и был выпущен корнетом в гвардию」のであった[3章]。トルストイの長篇『戦争と平和』のニコレニカ・ロストフもまた「騎兵少尉」になっている。しかしここで想起しておくべきは、19世紀初頭のロシアでは「騎兵少尉 корнет」が「少尉 подпоручик」ではなく、「少尉補 прапорщик」相当であったということである。

「少尉」、「騎兵少尉」、それに「中尉」は、将校の中ではもっとも少壮の士官たちであったから、ロシア文学の世界における多種多様な恋愛譚は彼らを中心に展開されるのである。サルトイコーフ・シチェドリーンの『ゴロヴリョーフ家の人々 Господа Головлёвых』ではアリーナ・ペトローヴナ・ゴロヴリョーフの娘が、「騎兵少尉」と駆け落ち結婚をしている[1章「家族裁判」]。

3. 〈中尉 поручик〉は、コサック軍の〈百人隊長 сотник〉に相当した。「中尉」は両肩に「星章」を3つつけた「肩章 погоны」を戴いていた。ゴーゴ

りの『ネフスキー大通り Невский проспект』に出てくるピゴーロフ中尉は、「『中尉だからといってそれがどうしたのだ』と言ってはいたものの、自分の官等に至極満足していた (он) был очень доволен своим чином, хотя и говорил: «что из того, что я поручик»」。概してロシア文学の主人公の中には「中尉」が少なくない。レールモントフの『現代の英雄』中の1篇『運命論者 Фаталист』の主人公ブウリチも、作者自身と同じように「中尉」だし、サルトイコフ・シチェドリーンの『ゴロヴリョーフ家の人々』では、イウドゥシカの息子——官費を博打ですってしまい、父親から援助を受けられないまま銃殺刑に処されてしまうペーテニカ・ゴロヴリョーフ——もまた「中尉」である [3章「家族の終焉」]。トルストイの『復活 Воскресение』の主人公、ネフリュードフは親衛隊の退役「中尉」であり、ドストエフスキーのドミートリー・カラマーゾフもまた退役「中尉」である。

ゴーゴリの『ヂカーニカ近郷夜話 Вечера на хуторе близ Диканьки』1部に収録されている『五月の夜、あるいは溺死した娘 Майская ночь, или утопленница』には、その二番目の妻が実はルサールカたちの烏ごっこの烏だったという「百人隊長」の話が出てくる。さらにショーロホフの『静かなドン』の主人公グリゴリー・メレーホフもまた、「百人隊長」まで勤め上げている。

4. <二等大尉 штабс-капитан> は、「騎兵隊 кавалерия」の<騎兵二等大尉 штаб-ротмистр>、コサック軍の<コサック二等大尉 подьесаул>に相当した。その「肩章 погоны」には、「縦縞 просвет」が1本、「星章 звёздочка」が4つついていた。レールモントフの『現代の英雄』に登場する善良で素朴なマクシム・マクシーモヴィチの持っているのが、この「二等大尉」という官等である。

レールモントフの物語詩『タムボフの出納長官夫人 Тамбовская казначейша』では主人公の「槍騎兵将校 уланский офицер」ガーリンのことが、次のように書かれている——

彼は齢 30 の益荒男にして騎兵二等大尉だが、

さながら騎兵少尉のようにすらりとしていた。

[その目は爛々と輝き、口髭は黒々としていた。

一言で言えば、彼は乙女たちの理想像、
栄えあるロシア美男子の一人であった。

XV]

彼は父親の資産をすべて、

まだ騎兵少尉のうちに使い果してしまった。

Он был мужчина в тридцать лет;

Штаб-ротмистр, строен, как корнет;

[Взор пылкий, ус довольно чёрный:

Короче, идеал девиц,

Одно из славных русских лиц.

XV]

Он всё отцовское именье

Ещё корнетом прокутил;

[14連10～11行目と15連1～2行目]

クップリーンにはロシア将校を装って活動する日本人スパイを扱った短篇があるが、この短篇『二等大尉リュブニコフ Штабс-капитан Рыбников』を知らない人はあるまい。

5. <大尉 Капитан> は、騎兵隊の <騎兵大尉 ротмистр> に相当した。原則的に「大尉」は「中隊 рота」、あるいは「砲兵中隊 батарея」の指揮を、「騎兵大尉」は「騎兵中隊 эскадрон」の指揮を執った。コサック軍ではこの官等を <コサック大尉 есаул> と呼んだ。

「騎兵大尉」だったのは、『ベールキン物語 Повести покойного Ивана Петровича Белкина』中の1編『駅長 Станционный смотритель』でドウニヤを連れていってしまう「驃騎兵 гусар」のミンスキー、『スペードの女王 Пиковая дама』のトムスキー、それに『大尉の娘』のズウリンであるが、これら三者

はいずれもプーシキン作品の登場人物たちである。『戦争と平和』のデニーソフもまた「騎兵大尉」で、彼はニコレーニカ・ロストフの所属する「騎兵中隊」の指揮官である。

レールモントフの『現代の英雄』中の1編『公爵令嬢メリー』には「龍騎兵大尉 драгунский капитан」が登場するが、それはグルウシニツキーの介添人である。

ゴーゴリの『ヂカーニカ近郷夜話』第2部中の1篇『恐ろしき復讐 Страшная месть』では、「コサック大尉」ゴローベツが自分の息子の結婚を祝福している。

6. <少佐 майор> は1731年から1798年までの間、<一等少佐 премьер-майор> と <二等少佐 секунд-майор> の2等級に分かたれていた。プーシキンによってでっちあげられた『ベールキン物語』の作者ベールキンの父親もまた、「二等少佐」と呼ばれている〔刊行者より〕。トゥルゲーネフの『父と子 Отцы и дети』の主人公バザーロフの祖父もまた、「なんでも二等少佐だったらしい。スウヴォーロフ將軍の配下だったとかで、いつもアルプス越え行軍のことを喋っていた секунд-майор какой-то; при Суворове служил и всё рассказывал о переходе через Альпы」〔21章〕。ピョートル・グリニョーフの父親は、「一等少佐」で退役している（プーシキンの『大尉の娘』）。19世紀中葉頃には、とうの昔に廃止されたこれら二つの官等名は、異様に古めかしい響を持つものであった。

1884年には「少佐」という官等が撤廃され、現役少佐には「大尉」の官等が与えられた。「大尉」は「少佐」相当だった「8等官」の中に「潜り込まされる подтянули」一方、「少佐」という官等は「下級将校 обер-офицер」へと転落させられてしまったのであった。

チェーホフの短篇『廃止！ Упразднили!』では、自分たちの官等が突然廃止されたことを悔しがめる二人の地主、すなわち、退役少尉補のヴィヴェルトフとイジーツァ少佐のことが笑いのめされている。

「少佐」の呼称は1935年に復活させられた。

革命以前の「少佐」の両肩には、「縦縞」2本と「星章」1つの「肩章 погоны」がついていた。

7-8. <中佐 подполковник> と <大佐 полковник> という二つの官等については説明する必要があるまい。これらは二つともに現代の階級に即応しているからである。

9. <旅団長 бригадир>。「大佐 полковник」と「少将 генерал-майор」の間に位置するこの官等は18世紀に廃止されたが、「旅団 бригада」という兵団呼称はそのまま存続した。ロシア古典文学には「旅団長」と題された作品が二つある。一つはフォンヴィージンの喜劇『旅団長』であり、もう一つは老人——すなわちかつてエカテリーナ二世の下で軍務に服した退役「旅団長」——に焦点を当てたトゥルゲーネフの短篇である。

『オネーギン』のヒロイン、タチヤーナ・ラーリナの父親もまた、「旅団長」として1788年のオチャコフの戦いに参加している [2章37節/「オチャコフ」はモルダヴィアにあったトルコの要塞]。

「旅団長」の上位にあるのは <将官の官等 генеральные чины> である。それらはときとして、いわゆる「文官將軍 статский генерал」と区別するために、<武官將軍 военный генерал> と呼ばれることもあったが、この呼称は現代人の耳には甚だ馬鹿げた響きを持っている。

将官中もっとも下位の官等は <少将 генерал-майор> だが、この官等については説明するまでもあるまい。下から二番目が <中将 (ゲネラル・レイテナント) генерал-лейтенант> であるが、18世紀末までは <中将 (ゲネラル・ポルウーチュク) генерал-поручик> と呼ばれていた。『大尉の娘』の主人公グリニョーフの父親は、「宮廷年報を読みながら、たまさか肩をすくめては、小声で何度も『中将だって!… あいつ、わしの中隊では軍曹だったのに!』と言ったりした читал придворный календарь, изредка пожимая плечами, и повторяя вполголоса: «Генерал-поручик!.. Он у меня в роте был сержантом!» [1章「親衛隊軍曹」]。

三番目の将官は部隊の種類によって <歩兵大将 генерал от инфантерии>、

〈騎兵大将 генерал от кавалерии〉、〈砲兵大将 генерал от артиллерии〉、〈工兵大将 инженер-генерал〉といった具合に呼称が変わる。非公式にはこれらすべての将官が〈陸軍大将 полный генерал〉と呼ばれた。1796年まで「陸軍大将」は〈総大将 генерал-аншеф〉と呼ばれた。『戦争と平和』のボルコンスキー老人、すなわちアンドレイ・ボルコンスキーの父親は退役した「総大将」である。『ドゥブロフスキー』のトロエクウーロフもまた退役「総大将」であるが、それに対してアンドレイ・ドゥブロフスキーは一介の退役「中尉」に過ぎない。このように隣人同士の官等の差は巨大であり、さらにその差は前者の巨万の富と後者のなんともつましい資産によって増幅されているのである [1章]。

軍人の官等の最高位は〈元帥 генерал-фельдмаршал〉であった。この官等に達した者の数はごく僅かである。したがってロシア文学の世界に「元帥」は、これに相当する文官の「尚書 канцлер」ともども、頭から捻り出した人物ではなく、実在した歴史上の人物としてのみ登場することになったのであった。トルストイは『戦争と平和』においてクウトゥーゾフ元帥の忘れ難い人物像を描出している。

軍人(将校、および将官)の官等表

等級 класс	官等 чин	敬称 Формула титулования
01	元帥 генерал-фельдмаршал	いと気高きお方/大閣下 высокопревосходительство
02	総大将(1796年まで) генерал-аншеф 歩兵大将 генерал от инфантерии 騎兵大将 генерал от кавалерии 砲兵大将 генерал от артиллерии 工兵大将 инженер-генерал	いと気高きお方/大閣下 высокопревосходительство
03	中将 генерал-лейтенант (1798年までは генерал-поручик)	気高きお方/閣下 превосходительство
04	少将 генерал-майор	気高きお方/閣下 превосходительство
05	旅団長(1799年に廃止) бригадир	いと敬うべきお方/尊下 выскородие
06	大佐 полковник	いと誉あるお方/貴下 высокоблагородие
07	中佐(19世紀には親衛隊にこの官等なし) подполковник	いと誉あるお方/貴下 высокоблагородие
08	少佐 майор (1798年まで一等少佐 премьер-майор と二等少佐 секунд-майор) コサック少佐 войсковой старшина	いと誉あるお方/貴下 высокоблагородие
09	大尉 капитан 騎兵大尉 ротмистр コサック大尉 есаул	誉あるお方/貴殿 благородие
10	二等大尉 штабс-капитан 騎兵二等大尉 штаб-ротмистр コサック二等大尉 подъесаул	誉あるお方/貴殿 благородие
11		
12	中尉 поручик 百人隊長(コサック中尉) сотник	誉あるお方/貴殿 благородие
13	少尉 подпоручик 騎兵少尉 корнет コサック少尉 хорунжий	誉あるお方/貴殿 благородие
14	少尉補 прапорщик	誉あるお方/貴殿 благородие

<注釈>

1884年に「少佐 майор」の官等が廃止されるのに伴って、「大尉 капитан」と「二等大尉 штабс-капитан」(=「コサック大尉 есаул」)という下位の官等が1等級引き上げられるとともに、「大尉」の官等は「下級将校 обер-офицер」の範疇に滑り込む形になった。そして「中尉 поручик」(「百人隊長 сотник」)は「10等級」となり、「少尉 подпоручик」(「コサック少尉 хорунжий」)は「12等級」となった。また「コサック少佐 войсковой старшина」は「中佐 подполковник」相当となった結果、「コサック二等大尉 подъесаул」という新しい官等が導入されることになった。「少尉補 прапорщик」の官等は戦時に限って使用された。

5 節

部隊の種類

Разновидности войск

読者は文学や芸術を通じて多種多様な部隊の名称に通暁しているが、それぞれを見分ける識別的な特徴についてはほとんど無知である。

一番有名なのは〈驃騎兵隊 гусары〉である。現在に至るまで「驃騎兵 гусар」のロマンチズムは、本や映画、芝居などで鑑賞者の心を惹きつけてきた。ロシアの「驃騎兵」に捧げられた詩作品、歌、物語を材料に浩瀚な書物を編むこともできるだろう。遠い昔に姿を消してしまった「驃騎兵」とはいったいどのような存在だったのであろうか？

「驃騎兵隊」とは、〈軽装騎兵隊 лёгкая кавалерия〉にあつて特殊部隊を編成する騎兵隊のことである。彼らは死をも恐れない勇猛な戦士、凄腕の剣士、頼りになる戦友として、さらには——これが順番的に最後というわけではないが——女性の心の比類なき征服者として高名を馳せていた。「驃騎兵」が身につけていた武器はサーベルにカービン銃、それにピストルであった。彼らをとくに際立たせていたのは、ハンガリーの騎兵をモデルに仕立てられた華やかで派手な制服であった。コジマー・プルットコフが次のようにからかったのも故なしとしない——「もしも見目麗しくなりたいのなら、驃騎兵隊に入るがいい Если хочешь быть красивым, поступи в гусары」[『思想とアフォリズム Мысли и афоризмы』16番]。彼らはモールを刺繍した制服〈ドロマン ドロман〉に身を包み、左肩に短いマント、〈メンチク ментик〉を垂らし、ぴちぴちの乗馬ズボン、〈チャクチールイ чакчыры (チクチールイ чикчыры)〉をはいていた。左足の膝付近まで凶囊、〈ターシカ ташка〉をぶら下げ、頭には羽飾りのついた長い円筒形の帽子、〈キーヴェル кивер〉を被っていた。履物は短目のブーツ、〈ボーチキ ботики〉であった。制服に刺繍されたモールは〈ブランデンプウルイ бранденбуры〉と呼ばれた。

リツェイの学生であつたプウシキンはひょうきんな詩作品『ガーリチヘ К

『Галичу』 [1815年] の中で、あたかも彼自身が「驃騎兵隊」への入隊準備をしているかのようなことを書いている —

ぴちぴちの乗馬ズボンをはき、
誇らしげな口髭をまるめ、
両肩に装飾肩章を輝かせよう — されば我、
気高きムーサの養い児たる我もまた、
戦う騎兵少尉の一員なり！

Надену узкие рейтузы,
Завью в колечки гордый ус,
Заблещет пара эполетов,
И я — питомец важных Муз —
В числе воюющих корнетов!

[2連8～12行目]

口髭、独特な輪形にまるめられた口髭は、「驃騎兵」の一大特徴であった。若きプーシキンは『口髭 Усы』 [1816年] と題した「哲学的な頌詩 философическая ода」を、「黒い口髭の勇者 черноусые удалцы」 [5連3行目] に献じている。

敵を急襲するには迅速に行動し、機転を利かせる必要があった。そのためやたらと背が高い者や体重の重い者は「驃騎兵」に採用されなかった。のっぽの「驃騎兵」というのはありえない概念であった。

トルストイの中篇『二人の驃騎兵 Два гусара』にはトルウビン父子という二世代の代表者と世代間の相違が描かれているが、息子についてはこう書かれている — 「彼には前世紀のあの血の気が多くて情熱的な、あけすけに言えば自堕落な傾向など影も形もなかった Даже и тени в нём не было тех буйных, страстных и, говоря правду, развратных наклонностей прошлого века」 [9章]。

「驃騎兵隊 гусары」に次いでとりわけ人気があったのは〈槍騎兵隊 уланы〉であった。ロシア最初の槍騎兵連隊が編成されたのは1803年のことである。「槍騎兵隊」もまた、「驃騎兵隊」同様、「軽装騎兵隊 лёгкая кавалерия」の変種である。彼らが武装していたのは、先端に「吹流し флюгер」、つまり彩色された小旗をつけた槍であった。読者は、レールモントフの詩作品『ボロヂノ Бородино』[1837年]の「斑模様の小旗を翻す槍騎兵隊 Уланы с пёстрыми значками」という1行を覚えておいでだろうか[10連4行目]？ この「小旗 значок」こそは「吹流し флюгер」のことに他ならない。「槍騎兵隊」はかつてフランス陸軍にも存在しており、ここで言及されているのはフランス軍の槍騎兵のことである。ロシア軍の場合、「吹流し」は個々の「槍騎兵隊」を区別する役割を担っていた。『戦争と平和』にはこう書かれている——「槍騎兵隊が、槍の吹流しをはためかせながら動き出した Уланы тронулись, колеблясь флюгерами пик」[引用箇所不明]。

「槍騎兵隊」の制服は伝統的に青色であった。1844年以降は、〈ウラーンカ уланка〉と呼ばれる天辺の四角い特殊な帽子、あるいは「兜 каска」を被っていた。しかし『戦争と平和』を読んで分かるのは、「赤毛の馬に跨った橙色の槍騎兵隊 оранжевые уланы на рыжих лошадях」が存在したということである。ここで言われているのは青い軍服に縫いつけられた橙色の飾りのことだが、この飾りが実際に登場するのはやっと1820年代のことである。「槍騎兵隊」の制服が二色だったことについては、レールモントフの『論争 Спор』[1841年]の中で言及されている——「斑模様の槍騎兵隊が、埃を巻き上げながら疾駆してゆく Мчатся пёстрые уланы, подымая пыль」[2連19~20行目]。

ゲルツェンは『過去と思索 Былое и думы』で、初めて「槍騎兵下士官 уланский юнкер」の軍服と装備を身につけたときのことを回想している——「赤い縁飾りを施された青くて丈の短い軍服をまとった私の何と素敵に見えたことか！ 帽子の飾り紐にポンポン、そして銃弾入れ Боже мой, как я казался себе хорош в синем куцем мундире с красными выпушками! А этишкеты, помпон и лядунка」[1部「子供部屋と大学(1812-34年) Детская и

フェドシューク『古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科』(その8)(鈴木淳一・飯島由大・伊藤敏宏・岡田京子)

университет」、2章1節「乳母たちの話と将軍たちの会話 Разговор нянюшек и беседа генералов」]。〈帽子の飾り紐 этишкёт〉とは制帽「ウラーンカ улánка」の天辺から襟まで垂れ下がる撚り紐 [先端に二つの房がついている] のこと、〈ポンポン помпón〉とは被り物につける球状の装飾品のこと、そして〈弾薬囊 лядúnка〉とは銃弾を入れる袋のことである。

青年レンスキーが亡くなり、オリガは悲しむが、やがてその悲しみも槍騎兵によって癒される —

槍騎兵はうまく彼女を虜にできた。

槍騎兵は彼女に心から愛された…

Улан умел ее пленить,

Улан любим ее душой…

[『オネーギン』、7章8～10節]

同じ頃、「驃騎兵」のピフチーンがタチャーナに言い寄っているが、こちらは失敗に終わっている [同前、7章26節]⁴。

タムボフにおける「槍騎兵連隊 уланский полк」の駐屯の様子については、レールモントフの物語詩『タムボフの出納長官夫人』に詳しい。「槍騎兵隊」は〈コレート колёт〉と呼ばれる、前合わせがホックの短い軍服を着用した。『タムボフの出納長官夫人』の主人公は次のように描かれている —

[そして三時に] コレートを身に纏い、

騎兵二等大尉は昼食へすつとんでゆく。

[И в три часа,] надев колет,

Летит штаб-ромистр на обед.

⁴ フェドシュークはタチャーナに言い寄る驃騎兵を「プラチーン Платин」としているが、「ピフチーン Пыхтин」の間違いであろう。

[26 連最終 2 行]

トルストイの『二人の驃騎兵』においてリーザが花婿として熱望しているのは槍騎兵であって、驃騎兵ではない——「いいえ、驃騎兵は嫌です [望みは槍騎兵です。だっておじさん、あなたも槍騎兵隊に勤務してらしたんですよね?… 驃騎兵の方々など知りたくもありません]。あの方々はどなたも命知らずだという話ですから Нет, я не хочу гусара; [я хочу улана: ведь вы в уланах служили, дядя?.. А я этих знать не хочу.] Они все отчаянные, говорят」 [9 章]。

〈龍騎兵隊 драгуны〉とは、歩兵による戦闘にも参加することを予定された騎兵隊のことである。彼らは馬の毛で作った〈羽飾り плюмаж〉のついた「兜 каска」によって一際目立っていた（レールモントフに「馬の尻尾をつけた龍騎兵 Драгуны с конскими хвостами」という一句がある [『ボロヂノ』10 連 5 行目])。そうした「兜」は装飾品と言うよりも、むしろサーベル攻撃を防御するための役割を果たした。

「龍騎兵隊」は「騎兵隊 кавалерия」に所属していたが、彼らの官等は、「驃騎兵隊 гусары」や「槍騎兵隊 уланы」とは違って、1882 年に至るまで「歩兵 пехота」と同様のものであった。レールモントフの『現代の英雄』の一篇『公爵令嬢メリー』において、「龍騎兵の騎兵大尉 драгунский ротмистр」ではなく、「龍騎兵の大尉 драгунский капитан」という表現が使われているのはそのためである。

〈胸甲騎兵隊 кирасиры〉は、「龍騎兵隊」同様、「重装騎兵隊」に属し、攻撃の主力としての役目を果たした。彼らは、刀剣や火器を防御するための〈胸甲 кираса〉と呼ばれる金属製の鎧を纏っていた。「羽飾り」のついた金属製の「兜」は、サーベルによる攻撃を防御するためのものだった。「胸甲騎兵隊」は丈の長いブーツ、〈ボトフォールトイботфорты〉を履いていた。彼らの着用する上着は〈コレート колёт〉であった。

「胸甲騎兵隊」に採用されたのは背の高い人々で、彼らの跨る馬は頑健で大柄であった。トゥルゲーネフの短篇『レベジャーニ Лебедянь』には「異常に

背の高い胸甲騎兵 *необыкновенно длинный кирасил*」の姿が描かれている。

トルストイの中篇『神父セルギー—Отец Сергей』の主人公は、若い頃に「胸甲騎兵連隊 *кирасирский полк*」内の「宮廷騎兵中隊 *лейб-эскадрон*」の指揮官を勤めている。

1813年まで「胸甲騎兵連隊」は「親衛隊」に属していた。「親衛隊」にはその他に「重装騎兵 *тяжёлая кавалерия*」の連隊が2つ編入されていた。「親衛重装騎兵連隊 *кавалергардский полк*」と「騎馬連隊 *конный полк*」である。ちなみに〈親衛重装騎兵隊 *кавалергардия*〉とは、換言すれば要するに「騎馬親衛隊 *конная гвардия*」のことである。「親衛重装騎兵隊 *кавалергарды*」も「騎馬親衛隊 *конногвардейцы*」も、黒い「胸甲」と山高の「兜」を着用した。

〈親衛重装騎兵隊 *кавалергарды*〉は、眼に鮮やかな白色の礼服で際立っていた。「親衛重装騎兵隊員 *кавалергард*」の特徴についてはプーシキンのリツェイ時代の詩作品『ナターリアへ К Наталье』[1813年]に描かれている

兜を被り、両刃の長剣を手にした
親衛重装騎兵を思い浮かべてはいけない。

Не представь кавалергарда
В каске, с длинным палашиом.

[5連10～11行目]

ナターシャ・ロストフを誘惑しようとするアナトーリ・クウラーギンは、「美丈夫の親衛重装騎兵 *красавец-кавалергард*」である（『戦争と平和』）。

実戦のとき以外は「親衛重装騎兵隊 *кавалергарды*」はもっと簡素な制服に身を包み、重い「兜」の代わりに「つばなし水兵帽 *бескозырка*」を被っていた。『戦争と平和』ではポロヂノの戦いに臨むクットゥーゾフが、どんな歴史画の彼もそうであるように、「親衛重装騎兵用の白い、赤く縁取られたつばなしの飼葉帽 *в белой кавалергардской, с красным околышем и без козырька*

фуражке」姿で描かれている⁵。官等に相応しい帽子を被っていないが、それは頭に古傷があったたからである。

〈騎馬親衛隊 конногвардейцы〉は、「親衛重装騎兵隊」同様、ロシア親衛隊にあって特権的な連隊を編成していた。その「名誉連隊長 шеф」はしばしば皇帝自身であった。『戦争と平和』ではオルミューツ近郊における閲兵式に、若きアレクサンドル I 世が「騎馬親衛隊の軍服 конногвардейский мундир」を着て現れ、青年ニコライ・ロストフに歓喜と感嘆の念を引き起こしている [1部3編8章]。プウシキンの『スペードの女王』は、「あるとき騎馬親衛隊員であるナルウーモフの自宅でトランプ博打が行なわれた Однажды играли в карты у конногвардейца Нарумова」と始まるが、ここからナルウーモフ家が名門であること分かる。

上述の二つの連隊で将校として勤めたのは、しかるべき華やかな体面を保ち、豪勢な生活を送るための豊かな資産を有する貴族階級の出身者たちであった。

19世紀も終わりに近づくと「驃騎兵隊 гусары」、「槍騎兵隊 уланы」、「龍騎兵隊 драгуны」、「胸甲騎兵隊 кирасиры」の軍事的機能、および装備の相違は次第に失われていった。たとえば1882年から1909年にかけて、「陸軍騎兵連隊 армейские кавалерийские полки」は「龍騎兵連隊 драгунские полки」と呼ばれていた。特殊な呼称や制服がそのまま残されたのは、ただ伝統に対して敬意を示すためだけであった。

話題を「歩兵 пехота」に移そう。

〈マスケット銃兵隊 мушкетёры〉。読者はこの言葉を聞くと大抵デュマの

⁵ この引用は『戦争と平和』3部2編15章からのものと思われる。ただ正確を期すために断っておけば、次のような一文からの抜粋である——「クットゥーフは、彼の体重で泳ぐようにしてだく足を踏んでいる馬の腹をせっかちに蹴り、ひっきりなしに首を縦に振りながら、被っている親衛重装騎兵用の白い（赤く縁取られた、つばなしの）軍帽に片手を添えて敬礼していた Кутузов, нетерпеливо подталкивая свою лошадь, плывшую иноходью под его тяжестью, и беспрестанно кивая головой, прикладывая руку к белой кавалергардской (с красным околышем и без козырька) фуражке, которая была на нём」

『三銃士 Три мушкетёра』を思い浮かべるが、ロシア軍の歩兵の主力は18世紀から19世紀初めにかけて(1811年まで)「マスケット銃兵隊 мушкетёры」と呼ばれていた。もっとも実際に彼らが身につけていた武器は「マスケット銃 мушкет」ではなく、「珪石火縄小銃 кремнёвое ружьё」と両刃の切れ味鋭い短剣〈テサーク тесак〉であった。彼らはベルトで背嚢を背負っていた。これらが「歩兵隊員 пехотинец」の一般的な装備であった。『智恵の悲しみ』では年老いた伯爵夫人がチャーツキーを兵役に出すよう訴えながら、コミカルな調子でこう叫んでいる——「彼にテサークと背嚢をおやり／ぺいたい [兵隊] にやるんです! 冗談なものですか! 法を引っくり返したん [破ったの] ですからね Тесак ему да ранец./В салтаты! Шутка ли! переменил закон!」[3幕20場]。

〈擲弾兵隊 гренадёры〉。「擲弾兵隊」とは最初、敵に導火線についた手榴弾「グレナード гренада」を投げつける兵士たちを指したが、やがて銃剣攻撃の巧みな兵士たちを指すようになった。親衛隊であるパヴロフスキー連隊の「擲弾兵隊」は、山高の円錐帽〈グレナデールカ гренадёрка〉を被っていた。「擲弾兵隊」に採用されたのは選抜された背の高い兵士たちで、「擲弾兵のようなのっぽ гренадерский рост」という表現はここに由来する。しかしときとして、たとえば1812年～1814年の戦役の後には、一般の「歩兵連隊 пехотные полки」や「狙撃兵連隊 егерские полки」もまたその戦功に応じて「擲弾兵連隊 гренадерские полки」に編入されたのであった。したがって「擲弾兵隊」はいつでもその背の高さと特別な肉体的才能によって際立っていたわけではない。「騎馬擲弾兵隊 конные гренадеры」というのも存在した。

〈狙撃兵隊 ёгеря〉。「狙撃兵連隊 егерский полк」が初めて出現したのは1797年のことで、彼らは1812年の祖国戦争において、「軽装歩兵隊 лёгкая пехота」の一種として大きな役割を果たした。迅速機敏な兵士集団の「狙撃兵隊」は、散開隊形にある主力部隊の前方で活躍し、的確な射撃と機動性によって際立っていた。『戦争と平和』ではアンドレイ・ボルコンスキーが「狙撃兵連隊」を指揮しており、その連隊の活躍はこの長篇の第3巻に詳しい。

1812年に「狙撃兵隊」は黄色か青の肩章がついた暗緑色の制服を着用し、山高の軍帽、「キーヴェル кивер」を被っていた。1812年の戦争後には「騎馬狙撃兵隊 конные егеря」というのも出現し、「軽装騎兵隊 лёгкая кавалерия」に編入された。

〈工兵隊 пионеры〉。1830年代まで陸軍工兵は〈ピオネール пионер〉と呼ばれていたのであった。

6 節

制服と記章の種類

Формы и знаки различия

19世紀中葉まで軍の部隊はすべてそれぞれの制服を持っていたが、それらの制服の細部はしょっちゅう変更された。制服とその変更を認可するのは皇帝自身であり、各皇帝が個人的に何らかの新奇さを制服に持ち込むこともしばしばであった。それは、たとえばニコライ I 世にとっては、現代で言うところのホビーであった。軍服や被り物、その他諸々の細部の多彩さは啞然とするほどに豊富で、現代においてそれらの違いを見分けることができるのは、ほんの一握りの歴史の専門家たちだけであろう。我々現代人は、グリボエードフの『智恵の悲しみ』のフレストーワの鬘にならって、こう言っても許されるであろう——「私は連隊を見分ける名人じゃありません Не мастерица я полки-то различать」。これに対してスカロズアップがどう答えたかを覚えておいでだろうか？ 彼はこう答えるのである——「制服が目印になります。／軍服には縁取りに肩章、それに襟章がついていますからね А форменные есть отлички。／В мундирах выпушки, погончики, петлички」 [3幕12場]。

ここではロシア古典文学でしばしば話題になるもっとも基本的な事柄だけについて述べることにしよう。

両肩につける〈肩章 погоны〉がロシア軍へ導入されたのは1801年のことで、一般兵士や下士官がつけていた。また「肩章」に代わるものとして将校と

将官専用の〈**装飾肩章 эполеты**〉が導入されたのは1807年のことである。「装飾肩章」と「肩章」は形と仕立ての点で異なっていた。前者は外形が丸く、刺繍が施されていたのである。「上級将校(佐官) штаб-офицеры」と「将官 генералы」の場合、「装飾肩章」の丸みの部分に沿って「房飾り бахрама」が垂れ下がっていた。1854年から1856年にかけて、将校と将官も「肩章」をつけるようになり、「装飾肩章」は礼装用として保管されるようになった。

もしも即座にソ連軍、そしてそれからロシア軍において以前の軍人官等(現在では軍人階級)や「肩章」が復活させられるとすれば、官等や「肩章」の差異を示す目印はかつてのものとはびたりと重なり合うものになるはずだ——そう考えている向きもあろう。だが決してそうではない。専制ロシアを再現した映画や芝居ではしばしば、その「肩章」に1本の「縦縞」と4つの「星章」をつけた「大尉 капитан」、あるいはその「肩章」に2本の「縦縞」と3つの大きな「星章」をつけた「大佐 полковник」を見かける。だが実際には革命が起こるまで「大尉」の「肩章」についていたのは1本の「縦縞」だけで、「星章」はついていなかったし、また「大佐」の「肩章」には2本の「縦縞」があるだけで、「星章」などなかった。2本の「縦縞」と3つの「星章」がついた「肩章」は「中佐 подполковник」のものとされていたのである。「陸軍大将たち полные генералы」の「肩章」にも「星章」はついていなかった。「少将 генерал-майор」の「肩章」、あるいは「装飾肩章」には1つではなく、2つの「星章」が、「中将 генерал-лейтенант」の「肩章」、あるいは「装飾肩章」には3つの「星章」がついていた。

19世紀初頭にはまだ将校たちは〈**飼葉帽 фуражка**〉を被っていた。この帽子は「**飼葉 фураж**」、つまり馬の餌とどんな関係にあるのであろうか? そもそも「飼葉帽」を被っていたのは〈**馬糧徴発隊員 фуражёр**〉、つまり飼葉の調達の携わる兵士たちであった。その後この「飼葉帽」が他の兵士にとっても便利であると考えられ、全将校の被り物として導入されることになったのである。下士官と一般兵士は〈**つばなし水兵帽 бескозырка**〉を被っていた。

1869年、一般兵士が体操に従事する際に、「軽いリンネル製のシャツ лёгкая

полотная рубаха」が配布されるようになった。それからまもなくして、教練や行軍、戦闘に際してはそうしたシャツの方が「重い軍服 тяжёлый мундир」よりも便利であるとの結論が出された。かくして〈詰襟軽軍服 гимнастёрка〉が定着することになったのであるが、その色は初め白かった。

1860年代になると陸軍将校のために、ホックで前合わせする暗緑色の軍服に代わって夏用制服としてボタンで前合わせする白い〈立ち襟軍服 китель〉が導入された。チェーホフの短篇『文学教師 Учитель словесности』には遠乗りの様子がこう描かれている——「将校用夏服である白い立ち襟軍服と黒い女性用乗馬服によって華やかに彩られた美しい遠乗りの集団が、屋敷から長い列をなしてゆっくりと歩を進めていった длинная красивая кавалькада, пестрея белыми офицерскими кителями и чёрными амазонками, шагом потянулась со двора」[1章]。だが第1次世界大戦までには全軍が〈保護色 защитный цвет〉の制服、すなわち〈カーキ色軍服 хаки〉を着用するようになった。この「カーキ色軍服」は行軍用として、1907年にすでに採用されていたものである。

7 節

1874年の改革

Реформа 1874 года

1874年の政令によって「新兵供出義務 рекрутская повинность」は、階層を無視した「全国民兵役義務 всеобщая воинская повинность」に取って代わられた。兵役遂行を免れることのできたのは、聖職者と教師だけであった。新法に従って21歳に達した青年はすべて徴兵された。政府が毎年新兵の必要量を定め、それに従って県や郡などへの割当が作成された。必要とされる数の「新兵 новобранец」が籤引きで選抜されると、残りの兵役検査合格者は戦時の場合のみに召集される〈後備軍 ополчение (義勇軍 ратники)〉として登録された。兵役期間は「現役 в строю」で6年、「予備役 в запасе」(召集がかかれば

現役復帰しなければならない) で9年の、都合15年であった。教育のある者は、現役を6年以下で済ますことができた。

〈志願兵 **вольноопределяющиеся**〉というカテゴリーも出現した。そう呼ばれたのは教育があり、(籤引きではなく) 自らの意志で軍務についた人々で、「下級将校(尉官) **младший офицер**」の試験に合格するまで1年間勤める権利が与えられた。チャーホフの中篇『我が人生 **Моя жизнь**』のポーロズネフは一時期「志願兵」として軍務についている。またクプリーンの中篇『決闘 **Поединок**』では、大学の記章を胸につけたフォーキンが無学な兵士や教育程度の低い兵士たちに混じって「中隊養成所 **ротная школа**」の授業を受けている姿を目にすることができる [11章]⁶。

8 節

陸軍幼年学校生、陸軍士官学校生、兵士の息子

Кадеты, юнкеры и кантонисты

これらの術語はロシア古典文学作品の中でしょっちゅう出会うが、誰もがその意味を把握しているわけではない。それゆえこれらの術語についても説明を加えておく必要がある。

〈陸軍幼年学校生 **кадэт**〉(フランス語の「年下の **cadet** (= **младший**)」に由来) と呼ばれたのは、未成年に軍事的素養を教授した特権的教育施設の生徒たちである。この教育施設への入学に際しては将校の子息たちに優先権が与えられた。1863年から1882年にかけて〈陸軍幼年学校 **кадэтский корпус**〉は〈陸軍ギムナジウム **военная гимназия**〉と呼ばれた。ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』に登場するゾシマ長老が、この「陸軍幼年学校」で学んでいる。息子が将来親衛隊に入ることを切望する母親によってそこへ送り込

⁶ ちなみに『決闘』の該当箇所は次のようになっている——「胸に大学の記章をつけた志願兵のフォーキンは、慇懃な態度で下士官の前に立っている **Вольноопределяющийся Фокин, с университетским значком на груди, стоит перед унтер-офицером в почтительной позе**」。

まれたのであった [6編2章 (B)]。またプウシキンの『ドゥブロフスキー』の主人公もまた「陸軍幼年学校」で学んでいて、卒業後に「騎兵少尉 корнет」として、つまり卒業後すぐさま将校として、親衛隊に配属されている [3章]。しかしながらアレクサンドル三世の時代 [在位 1881-94] になると、「陸軍幼年学校 (陸軍ギムナジウム)」における教育は将校へ昇進するには不十分であるとみなされた。そのため 1882 年以降、将校になるためには〈陸軍士官学校 юнкерское училище〉でさらに継続して教育を受けなければならなくなったのであった。

ペテルブルクには貴族の子弟のための〈貴族幼年学校 пажецкий корпус〉という特権的な幼年学校があった。この学校の生徒は本来、「宮廷小姓 придворный паж」に採用された少年たちであった。トゥルゲーネフの『父と子』に登場するパーヴェル・ペトローヴィチ・キルサーノフはこの「貴族幼年学校」の卒業生である [7章]。この学校の上級生は宮廷儀式への参加が許可されていて、〈宮廷小姓 камер-паж〉と呼ばれた。

クूपリーンは自らが「陸軍幼年学校」に在学したときのことを、またクロポトキンは「貴族幼年学校」の教育風景を、それぞれ『岐路 На переломе』と『ある革命家の手記 Записки революционера』に書き記している。

ロシア古典文学の世界において出会う〈陸軍士官学校生 (士官候補生) юнкер〉は、似通ってはいるが、厳密には若干異なる二つの意味合いを持っている。19 世紀の前半にこう呼ばれていたのは、専門教育も受けずに兵役を志願した青年貴族たちである。彼らは様々な恩恵に浴しながら「下士官 унтер-офицер」として連隊に勤務し、その後最下位の将校官等、すなわち「少尉補 прапорщик」か「騎兵少尉 корнет」の官等を授けられた。

この初期の「士官学校生 (士官候補生)」だったのは、レールモントフの『現代の英雄』中の 1 編『公爵令嬢メリー』に出てくるグルウシニツキー、それにトルストイの『コサック Казаки』に出てくるオレーニンである。グルウシニツキーは(「士官学校生」として薄手の外套を着ることもできたはずなのに)「独特なおしゃれ心から厚い兵隊外套を着ていた носил, по особенному

роду франтовства, толстую солдатскую шинель」[5月11日付手記]。

1820年代になると、青年貴族の中から将校を取り急ぎ養成しなければならない必要性に応じて、〈陸軍士官養成所 юнкерская школа〉が創立された。この養成所の生徒もまた「士官学校生(士官候補生)」と呼ばれた。レールモントフその人がこうした養成所の一つ(正式名称は「親衛隊特務曹長、および騎兵隊士官候補生養成所 Школа гвардейских подпрапорщиков и кавалерийских юнкеров」)で学んでもいれば、文学作品の登場人物であるライスキー(ゴンチャロフ『懸崖』)、それにトゥルゲーネフの『アーシャАся』の主人公ガーギンもまたこうした養成所で学んでいる。ガーギンはこの養成所から親衛連隊に編入されている。レールモントフの『公爵夫人リゴーフスカヤ』に出てくるジョルシ・ペチョーリンは「陸軍士官養成所」に入学しようとするが、結局は養成所を経ないで即座に連隊へ入隊する道を選んでいる。

この「陸軍士官養成所」を士官養成のために1864年に創設された中等教育機関〈陸軍士官学校 юнкерское училище〉(1910年以降は〈陸軍学校 военное училище〉)と混同してはならない。こうした「士官学校」の一つ(モスクワにあるアレクサンドロフスコエ士官学校)については、クップリーンが自伝的長篇『陸軍士官学校生(士官候補生) Юнкера』の中で詳述してくれている。

1805年から1856年にかけて〈兵士の息子 кантонист〉と呼ばれたのは、出生直後から軍当局に登録されている兵士の子息たちである。彼らは特別な初等士官養成所で教育を受け、卒業とともに下士官の位を、あるいはごく稀に将校の位を与えられた。「兵士の息子」出身者は大多数の兵士に近い存在だったが、貴族出身の将校たちからはその出身と教育程度の低さのために軽蔑の目で見られた。オストロフスキーの戯曲『森 Лес』に出てくる退役将校ボダーエフは、グアルムィシスカヤにこう言っている——「甥ごさんは貴族だというのは、まるで兵士の息子のような書きぶりで、恥ずかしいとは思われませんか И вам не стыдно, что ваш племянник, дворянин, пишет, как кантонист」[1幕4場]。

9 節

いくつかの忘れ去られてしまった言葉

Некоторые забытые слова

〈アルチークウル Артикул〉。この語は、現代語では「製品の型番号 тип изделия」という意味である。だとしたら、ネクラソフの『兵士の母、オリナ Олина — мать солдатская』(1863)にあるフレーズはどう解釈すべきであろうか？ そこには兵役に疲れ果て、家に戻った病人が、「小銃をいじっていたが、／やがて小さな家がまるごと身震いした Артикул ружьём выкидывал,／Так, что весь домишка вздрагивал;..」とある [25 連 1～2 行目]。実はかつて「アルチークウル」は「アルチクウル」と発音され（つまり第 2 音節ではなく、最終の第 3 音節にアクセントがあった）、「小銃の操作法 ружейный приём」を意味したのである。

〈随行將軍 генерал-адъютант〉。これは皇帝に随行する將軍のことである。トルストイの『戦争と平和』にはアレクサンドル I 世の「随行將軍」バラシエフが登場する。この歴史的人物は、長篇の一句を借りれば、「陛下にもっとも近い人物の一人 одно из ближайших лиц к государю」である [3 部 1 編 3 章]。

〈臨時雇 зауряд〉。この語は、ある官等の義務をその官等を持たない人物が遂行できるようにするために、官等の接頭辞として用いられた。たとえば「臨時（特任）少尉補 зауряд-прапорщик」、「臨時（特任）百人隊長＝コサック中尉 зауряд-сотник」等々といった具合である。

〈レモント（馬匹補充）ремонт〉、〈レモンチョール（馬匹補充官）ремонтёр〉。ここでの「レモント」、「レモンチョール」は、修理や修理工を意味しているのではない。かつて「レモント」は軍用のために馬を調達することを意味し、その任務を委任されたのが「将校レモンチョール офицер-ремонтёр」、つまり「馬匹補充将校」だったのである。ちなみに 1812 年のナポレオン戦争時、若きグリボエドフはこの「馬匹補充官」であった。

〈下級将校 **субалтёрн-офицёры**〉。これは「中隊 **рота**」、あるいは「騎兵中隊 **эскадрон**」、あるいは「砲兵中隊 **батарея**」の指揮官の指揮下にある「下級将校(尉官) **младшие офицеры**」のことである。

〈**プラーツ (練兵場) плац**〉。ここでは接頭辞的に用いて、「輔佐役 **помощник**」の意味。たとえば19世紀前半には「副官補佐 **плац-адъютант**」、「少佐補佐 **плац-майор**」(「要塞指揮官 **комендант**」の補佐役)という呼称があった。

〈侍従武官 **флигель-адъютант**〉。この呼称が与えられたのは、皇帝に随行する将校たちであった。トルストイの長篇『アンナ・カレーニナ』のヴロンスキーがこの「侍従武官」であり、『コサック』の主人公で士官学校生(士官候補生)のオレーニンはこの地位に就くことを夢見ている。またトルストイの作品では未来の神父セルギーが、「侍従武官」の地位を約束されていたにもかかわらず、輝かしい出世街道から身を引いている。

〈**フルウント (横列) фронт**〉。これは「フロント(横列) **фронт**」の古形であるが、現代語的な横一列という意味ではなく、兵士の隊列のことである。『智恵の悲しみ』ではソフィアがスカロズuppのことをこう評している――

どこが素敵だっていうのよ！ いやはやもう、
兵士の横列やら縦列のことを耳にすると身の毛がよだつわ。

Куда как мил! И весело мне страх

Выслушивать о фронте и рядах;

[1幕5場]

一般兵士は上官の前では「直立不動の姿勢 **во фронт**」、すなわち背筋をぴんとのぼし、直立不動で「気をつけ **смирно**」の姿勢を取ることになっていた。

クゥプリーンは自著でこう書いている――「最高の前線軍人は、第二中隊の士官学校生たちであった **отличные фронтовики были юнкера второй роты**」。またある将校についてはこう書いている――「最高の前線軍人であり、筋骨逞

しい若者であった отличный фронтовик и молодчинище」⁷。とはいえ実際の戦争など何一つなく、話題になっているのが「教練 строевые учения」のことだとすれば、この将校については「教練熟練者 строевик」という用語を当て嵌めることもできるだろう。

軍隊における「敬称 формулы титулования」は、文官の場合同様、「官等表」に即したものであった（6章1節と7章4節の表を参照のこと）。だが一般的に言えば、それはただ低い官等の軍人たちだけに関わる問題であって、将校たちが敬称をつけて呼ばなければならなかったのは、「陸軍将官 генералы」や「海軍将官 адмиралы」、「将校 офицеры」、それに「公爵 князь」や「伯爵 граф」たちだけに過ぎなかった（後二者の場合は家柄に対する敬意を表すために）。こうした位以外の人々に対して呼びかけるときは、相手の官等に「殿 господин」をつけるだけであった。ペチョーリンとマクシム・マクシムイチは公的な会話ではお互いに「二等大尉殿 господин штабс-капитан」、「少尉補殿 господин прапорщик」と呼び合っている（レールモントフの『現代の英雄』中の1編『ベーラ』）。

軍隊における敬称制が廃止された1917年の2月革命以降になると、「殿+官等名 господин+название чина」という普遍的な呼び掛けが義務化された。将軍が少尉補に「少尉補殿 господин прапорщик」と呼び掛けるだけでなく、少尉補が将軍に対して「将軍殿 господин генерал」と呼び掛けるようになったわけだが、それは前代未聞の出来事であった。

⁷ どうやら複数の作品からの引用らしいが、作品名、該当箇所とも不明。